

は し が き

博士の学位を授与したので、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定に基づき、その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をここに公表する。

氏名	金 英花
生 年 月 日	1972年10月28日
本 籍	大韓民国
学 位 の 種 類	博士（国際学）
学 位 記 番 号	博第11号
学位記授与年月日	平成26年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
研究科・専攻の名称	宇都宮大学大学院国際学研究科（博士後期課程）国際学研究専攻
学 位 論 文 題 目	中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育 －出稼ぎの変容と留守児童の問題から見る家族生活－
論 文 審 査 委 員	
	主査 教授 田 卷 松 雄
	教授 中 村 祐 司
	教授 丁 貴 連
	教授 松 金 公 正
	教授 佐々木 史 郎
	教授 鄭 雅 英

博士論文の内容の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏 名 金 英花

本論文の課題

本論文は1990年以降の中国朝鮮族の韓国への出稼ぎ現象が、出稼ぎ者本人、残された子ども達、そして、送り出し社会にどのような変容と影響を与えたかを考察したものである。中国朝鮮族の韓国への出稼ぎの大きな特徴は、移動する人の多さと滞在の長期

化である。大量の移動は家族分散を招き、家族という概念もこれまで以上に複雑で多岐にわたる様相を見せている。それは一部の地域の問題に留まらず、朝鮮族の家族のあり方に根本的な変容をもたらす可能性も否めない。長期にわたり親との分散を余儀なくされる子どもたちは、どのような教育・生活環境に置かれているのか。出稼ぎ現象から20年が過ぎた現在、出稼ぎの態様も大きく変化している。

本論文ではこうした問題意識から出発して、出稼ぎ先での朝鮮族の現状と送り出し社会での残された家族(主に留守児童)の現状と実態を明らかにすることで、子どもの教育をめぐる家族や社会の戦略を浮彫りにし、更にそれを通じて朝鮮族が経験している家族の変容と複雑なライフスタイルの一側面を捉えようとする。目指した。

論文の構成と内容

本論文では、韓国政府の受け入れ政策の変遷、韓国における出稼ぎの変容、送り出し地域中国延辺州龍井市の留守児童問題、家族と社会の対応と取り組みという4つの論点から、時代の流れの中で幾つかのポイントとなる時点を選び、その変化を追究することで、送り出し社会と受け入れ社会における出稼ぎの現状を明らかにしようと努めた。全体的にはトランスナショナル論の概念を視野に入れながら研究を進めた。使用したデータは主に韓国と中国で2回ずつ行ったアンケート調査とインタビュー調査によるものである。具体的な内容は以下の通りである。

第1章では、先行研究を踏まえながら、研究の課題と意義について提起し、本論文の全体的な構想と理論的な枠組、概要を提示した。第2章では、1990年代から今日に至るまでの韓国政府の朝鮮族に対する受け入れ政策の変遷について論じた。第3章では、出稼ぎ先での親の就労状況と生活に着目して、受け入れ政策に伴う出稼ぎの変容を捉えた。更には出稼ぎの長期化の原因について追究し、それはまた家族と子どもの教育にどのように反映されているかを検証しようと努めた。第4章では、親の出稼ぎにより、本国に残された子どもの教育へ及ぼした影響について、龍井市の事例を中心に、留守児童の現状と問題点を明らかにした。第5章では、一連の変化と影響を受けて、送り出し地域の行政と社会は留守児童の問題にどのように向き合ってきたかを論じ、家族と社会の戦略を浮彫りにし、家族分散の中、子どもの教育の可能性を見出した。第6章では、全体をまとめ、朝鮮族の家族の変容について、トランスナショナルな生活について解釈を行った。

主な知見

(1) 朝鮮族に対する韓国政府の受入政策をみると「政策不在の時期」から、「外国人労働者」としての管理中心の時期、そして「在外同胞」としての配慮に基づく現在の政策を経ている。その特徴をみると規制から緩和へ、拒絶から受入へ、管理から包容へ、閉鎖から開放へと向かっている。朝鮮族の移動も不法から合法へ、中高年層から若層へ、単純労働から高学歴までと変化してきた。(2) 朝鮮族の長期滞在現象は継続しているが、その背景は大きく変化してきた。出稼ぎの長期化の原因としては、長年、「不法滞在」を

余儀なくされた制度上の制約と経済的な理由が主であったが、2002 年を機に合法滞在が出来るようになった以降（特に 2007 年以降）は出稼ぎ者本人の意識・価値観の転換の変化が挙げられる。(3) 出稼ぎ者のトランスナショナルな生活は本国に残された子どもたちに影響を与えている。龍井を対象とした調査からは、留守児童が「特殊な群体」から「主流群体」へと転換していて、普遍的な現象になっていた。一方、留守児童生徒と非留守児童生徒の間には直面する問題や意識の面で大きな差は見られなかった。ただし、留守児童生徒が心理的な問題をやや多く抱えているという結果が確認された。(4) 長期にわたる家族分散で「拡大家族」、「擬似家族」、「想定家族」という新しい形態の家族も現れている。通信技術の発達は伝統的な家族の間で国を離れていても日常的なコミュニケーションを可能にした。そして、残された子どもたちの親の出稼ぎについての理解度も少しずつ深まっている。

課題と展望

朝鮮族の場合、大量の出稼ぎは「経済活動」は韓国で、「未成年者の子どもの教育」は本国でという家族機能の分離による脱地域的家族生活が形成されている。その結果、家族の変容をもたらし、伝統的な家族の概念を変える多様な家族の形態も現れている。しかもこの家族形態と生活は今後も長年続く見込みである。家族形態の変容の事実を踏まえながら、子どもの教育に対する行政的な取り組みも進められてきた。子どもの教育をめぐる家族や社会の戦略をより多面的に検討していく必要がある。

博士論文審査結果の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 金 英花

1. 審査概要

(1) 予備論文

2013年9月13日（金）、金英花の学位請求予備論文「中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育：出稼ぎによる留守児童生徒問題と対処、適応に関する研究」が提出された。国際学研究科所属教員5名と外部審査委員1名による予備論文審査委員会が設置され、審査にあたった。同委員会はず、**「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士学位授与に関する取り扱い要領」第5条**で規定された書類が提出されていることを確認した。提出された予備論文を約一ヶ月に渡って精査し、10月15日（火）に開催された第1回審査委員会で同論文が学位請求論文に値すると、全員一致で判断した。同時に以下の点での改善を要求することとした。

- ① 先行研究の成果と課題をもっと丁寧に整理し、本論文の独自性を明確にすべきである。
- ② トランスナショナル論の概念を視野に入れた論理展開をするべきである。
- ③ 中国と韓国での調査結果をもっと体系的に関連づけるべきである。
- ④ 龍井市の地域特性に関する分析をより深めるべきである。

(2) 学位論文(本論文)

2013年12月16日（月）に金英花の学位請求本論文「中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育 - 出稼ぎの変容と留守児童問題からみる家族生活 -」が提出されたのを受けて、論文審査委員6名による学位請求論文審査委員会が発足され、審査にあたった。まず、**「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士学位授与に関する取り扱い要領」第10条**で規定された書類が提出されていることを確認し、次に予備論文審査で指摘された事項が十分に改善されている点を認め、全員一致で最終試験実施を承認した。

(3) 最終試験

最終試験は2014年1月20日（月）に開催された。最終試験では、金英花が前年度の予備審査委員会と第1回審査委員会での指摘事項に対する改善点を説明した後、審査委員による質疑応答とコメントの形で実施された。試験においては、各審査委員が疑問点について逐一説明を求めたのに対し、金氏はいずれも十分な説明を与えた。よって、同日行われた第2回審査委員会は、本論文の内容と最終試験の結果を踏まえて、全員一致で金英花が

宇都宮大学博士(国際学)の学位の要件を満たしているとの結論に達した。なお、内容の修正に合わる形で副題を若干変更したことも了承した。

2. 審査結果

本論文の審査結果は次のとおりである。

本論文は中国朝鮮族の出稼ぎによる移動という現象に焦点をあて、出稼ぎがもたらす影響について、出稼ぎ者本人と残された家族、子どもという視点から接近し、それらの変容を捉えようとしたものである。何よりも、龍井市での300人の児童生徒を対象にしたアンケート調査と韓国での出稼ぎ者及び関係者に対するインタビュー調査が高く評価された。龍井市でのアンケート調査は教育委員会や学校関係者への粘り強い働きかけによって実現した。韓国でのインタビュー調査では、サンプリングの難しさもあり、対象者数は限られているが、出稼ぎ者が直面する事実や子どもの教育に対する意識などが丁寧に掘り起こされている。次に、中国朝鮮族の韓国での長期滞在の背景が韓国政府の受け入れ政策の変遷と朝鮮族の価値観・意識の変化という観点から、説得力を持って説明されている。さらに、従来の研究の多くは、出稼ぎ現象を朝鮮族社会の危機論的な観点から捉えているが、本論文は、出稼ぎや家族の変容を多面的に捉え、その意味について多元的に考察している。総じていえば、中国また、韓国と中国という二国間にわたるフィールド調査を通じて、受け入れ国韓国での出稼ぎの変容と送り出し地域龍井市での留守児童の現状と実態を明らかにし、家族と社会の戦略と対応を浮彫りにした点、さらに、集めたデータに基づいて朝鮮族の家族が経験している変容と複雑な家族生活を検証しようと試みたことは高く評価できる。先行研究を丁寧に整理することで本論文の独自性も明らかにされた。

ただし、出稼ぎ現象が子どもの教育に与えた影響をより深く考察するには、アンケート調査だけではなく、子どもたちの就学や就職などについての追跡調査が不可欠であろうと指摘があった。また、トランスナショナルな枠組みや理論についての理解が不十分で、この結果、出稼ぎ者や子どもたちの生活スタイルに関する認識がやや雑で強引であった。二国間にわたるフィールド調査の体系化については引き続き検討していく必要がある。